

アルゼンチン滞在記
タンゴとワインとサッカーと
ユキーナ・富塚・サントス

1	本当にいい空気を吸って、ブエノスアイレス	3
1.1	アルヘンティナーの先生.....	3
1.2	住んでもいい街ブエノスアイレス.....	5
1.3	旅先で一番疲れること.....	7
1.4	旅は道連れ.....	9
1.5	ブラジル行きのビザ.....	11
2	リトルイタリー	12
2.1	タンゴ発祥の地.....	12
2.2	アルゼンチン人のプライド、最もイタリア人に近い着こなし.....	13
2.3	ラテンにとっての着こなしの基本.....	14
2.4	エセ・ボカファン.....	16
2.5	モン・デュ 私の神様.....	17
2.6	川崎マヨール.....	20
2.7	アカシアの木陰に十字星.....	22

1 本当にいい空気を吸って、ブエノスアイレス

1.1 アルヘンティーナの先生

幼いマルコ少年が、お母さんに会うために、はるばるイタリアジェノバから、アルゼンチンを目指すのは、「母を訪ねて三千里」である。

私は今、かつての師を訪ねるべく、パナマ経由でアルゼンチンの首都、ブエノスアイレスを目指している。眼下に広がる大平原パンパ、なぜか頭の中には、あのアニメのBGM「はるかあ～草原のお～」が流れている。

師といっても、いわゆる中学、高校の恩師というわけではない。モニカ先生は私に1年間カスティリアーノ（スペイン語）をプライベートで教えてくれていたのである。

留学の準備のため、英語の勉強を続ける傍ら、こつこつと始めたカスティリアーノである。イタリア語、スペイン語、フランス語、ラテン系の言語は共通項が多い。イタリア語をよりいっそう極めるよりも、他のラテン系の言葉を会話ベースまで引き上げる方が有効だろうと思った。

トフルの予備校に毎週末かよい、午後はスペイン語のプライベートレッスンを1時間受けた。もっぱら話題は私の留学、仕事のことだったが、私の持ち込むテキストを、モニカ先生は嫌な顔ひとつせず、事細かにフォローしてくれた。

英語に行き詰っていた私としては、いい息抜きをさせてもらっていた。あまり進歩が無いので、教え甲斐のない生徒で甚だ申し訳なかったが、前回教えただろ！と怒られそうなベーシックなこともいつも根気強く繰り返し復習してくれた。全くもって有難い限りであった。

このモニカ先生、見た目は全く日本人である。田園都市線や、東横線に昼間乗っていれば必ず見かける、品のいい中年のご婦人である。初対面でレッスンルームに現れた

ときは、このどこから見ても日本人の風貌で、「ケ・バスアセール？一体何をするの？」と流暢なカスティリアーノで話しかけれ、度肝を抜かれたのを覚えている。

繰り返しになるが、カスティリアーノは濁音が多い、お上品な奥様には少々合わない言語ではある。ちなみに初回のレッスンの終わり、先生はこんなカッコイイ啖呵で締めくくった。（無論カスティリアーノである）

「あたしはあんたが気に入った。次からはユキ、あんたとレッスンがしたい。次の日程はいつにするかい？」

それもそのはず、モニカ先生は生粋のアルヘンティーナ、アルゼンチン人であった。ブエノスアイレスで二世として生まれた。その後、日本人の男性と結婚したので、日本語はそこそこだけれども、やはり彼女の母国語は南米各国でマジョリティーになっているカスティリアーノ（スペイン語）である。ブエノスアイレスではスペイン語の先生をしていたというモニカ先生は、スペイン語とカスティリアーノさらには南米のスペイン語の違いも折に触れて教えてくれた。

留学先も決まらぬまま、昔の会社を辞める決意をした。そのとき送ったメールの返事にこう書いてあった。

ユキ、決して後ろを振り返ってはいけない、家のこと仕事のこと、あらゆるしがらみは、すべて捨てて、前だけを向いて前進していきなさい。前にだけ、どんどん、ひたすら突き進んでいきなさい。

できが悪い生徒だったので、正確には覚えていないが、すべてを振り捨てて（デハレトド）というフレーズは、あたかも声に乗って発せられたメッセージのように私の心に残っていた。

自分の母親でさえも言うてはくれなかった励ましを、まさかモニカ先生からいただけたとは思っていなかった。

南米行きが決まった際、懐かしさから先生にメールを出してみた。程なくして返ってきた返事には、何と3月半ばまでブエノスアイレスに居ること、先生を訪ねてもいいと嬉しいウェルカムメッセージがあった。

これは行くしかない、もともと今回の南米沈没旅行では、ブラジルをメインのDestinationにしていた。それなのにブラジル行きのヴィザはまだ取れていなかったのである。ペルーで申請しても最低5日はかかる。であるならアルゼンチンで申請しよう。

私は早速ブエノスアイレスまでのチケットを買い、これがエアコパ（パナマ航空）でパナマシティ乗り継ぎという大回りになったのだが、2月の始めにブエノスアイレスに降り立ったのである。

1.2 住んでもいい街ブエノスアイレス

街の雰囲気がヨーロッパに似ている・・・これが、私が最初に抱いたブエノスアイレスの印象である。

それもそのはず、アルゼンチンに移民として入ってきたのはスペイン人、イタリア人などヨーロッパの白人がほとんどであったらしい。モニカ先生に言わせると、南米の中でもアルゼンチン人は自らの血統が白人系である唯一の国民として若干スノビッシュ（お高く止まっている）点も否めないらしい。

ははあ、なるほど、街並み、道路と広場のつくり、人々、食文化、あらゆるところに、私がこれまで慣れ親しんだイタリアがあった。季節によっては曇天が続くこともあるそうだけれど、概して空は青く、いつでも太陽がサンサンと降り注いでいる。まさに南米のイタリアであった。

モニカ先生宅に居候することを許してもらい、荷物をおいて、さっそく街中散策にかけた。わずかワンブロック歩いただけで、この街の空気の良さが、身に染みてきた。まさにブエノス（とても良い）アイレス（空気）である。

ペルーでアンディオ系の人々の顔立ちに見慣れると、ブエノスアイレスのイケメン達にはっとさせられる。基本はあくまでイタリア系、スペイン系、とにかくラテンである。それがいい具合に交じり合っている。もともとここアルゼンチンに多いイタリアジェノバの人々は北系、質実剛健、長身ブロンド、北ヨーロッパのゲルマンに近いところもある。しかし、ここアルゼンチンは同じイタリアでも、同時に、シチリア、ナポリといった南からの移民も多いのである。これにスペインが加わったもんだから、民族、人種がじつに綺麗に混ざっている。

電車に乗っても、街を歩いても、スキップしてしまいたくなるほどイケメン率が高い。

私のデスティネーションは決まった。無意識のうちに胸の前で、拳のグーを作る。

人だけでなく、建物、街並みもとってもいい。イタリア人のセンスというものが随所に見て取れる。入植当時の旧市街、イタリア系移民が多いエリアでは、イタリア風、スペインブルボン風、これにイスラムが加わった建物スタイルなど、思わず足を止めて見入ってしまう造りの建物が多い。

ちなみに、ラテンの国に欠かせないオペラハウスとしては、テアトロ「コロン」が名高い。モニカ先生の勧めもあり、ツアーガイドに乗って中を観光したが、結構いいつくりである。広さはミラノのスカラ座程度、調度品も趣味が良く、冬の（アルゼンチンでは5月から12月までがオペラシーズン）時期には目玉演目が続き、政界のおえらい方々も現れるそうである。

言うまでもないことだが、食べ物もウマイ。マジでウマイ。イタリアンの技術にこれでもかというほどリッチな風味の原材料を使うのである。これで美味くなければ・・・である。ブエノスアイレスは思った以上にカルチャーのダイヴァーシファイ(多様性)が進んでおり、インド料理、エスニック、中華、ジャパニーズも結構イケルのである。

もっとも、モニカ先生いわく、ブエノで最も有名な和食屋は経営、マーケティング、サービスの点でイマイチなのだそうである。